

(2) 動物

動物（哺乳類、鳥類、両生類・爬虫類、昆虫類、水生生物）について以下に示します。また、埋め立て前（1997年）と埋め立て中（2003年）の動物の分布特性を図4.2.1、4.2.2にそれぞれ示します。

埋め立て前は盆地中央低地の耕作地や人家周辺は草地性の動物（バッタ類、カヤネズミなど）の生息場であり、周辺樹林域では樹林性の動物であるイノシシやキツネ、タヌキ、ノウサギ、ムササビ、ニホンリスといった哺乳類、オオタカやフクロウといった猛禽類、キビタキ、サンコウチョウといった樹林性の夏鳥、クロコノマチョウ、モリチャバネゴキブリなどの樹林性の昆虫類などが生息し、沢部ではタカハヤ、カワヨシノボリなどの魚類、タゴガエルなどの両生類の重要な生息場となっていました。また、樹林と平地・耕作地との境は、林縁的環境（環境推移帯：エコトーン）⁸として、林縁を利用する鳥類（ホオジロなど）やチョウ類（イチモンジセセリ、ナミアゲハなど）の生息場であるとともに、樹林と草地を繋ぐ環境となっていました。

埋め立て後は、中央低地の耕作地や草地、小川や沢、斜面下部の樹林（スギ・ヒノキ植林や一部常緑広葉樹林、竹林）などが消失し、広大な裸地が一時的に出現し（図4.1.3、図4.2.2）、その後の土地利用が行われました。それに伴い、動物相も大きく変化しました。一方、様々な自然環境保全対策もとられました。対策の基本の詳細については後述しますが、地域生態系の特徴を極力残すことに留意しました。その結果、一定程度の成果を得ることができました。

⁸ 環境推移帯（エコトーン）：空間的に相接する植物群集、植生タイプあるいは生息地タイプの中の狭い移行帯もしくは推移帯を指す。このような場所では両側の群集が供給源となって、それぞれの種が混交する場合があります。群集の中心よりも種多様性が高くなる。（生態学事典、日本生態学会編、2003、共立出版）

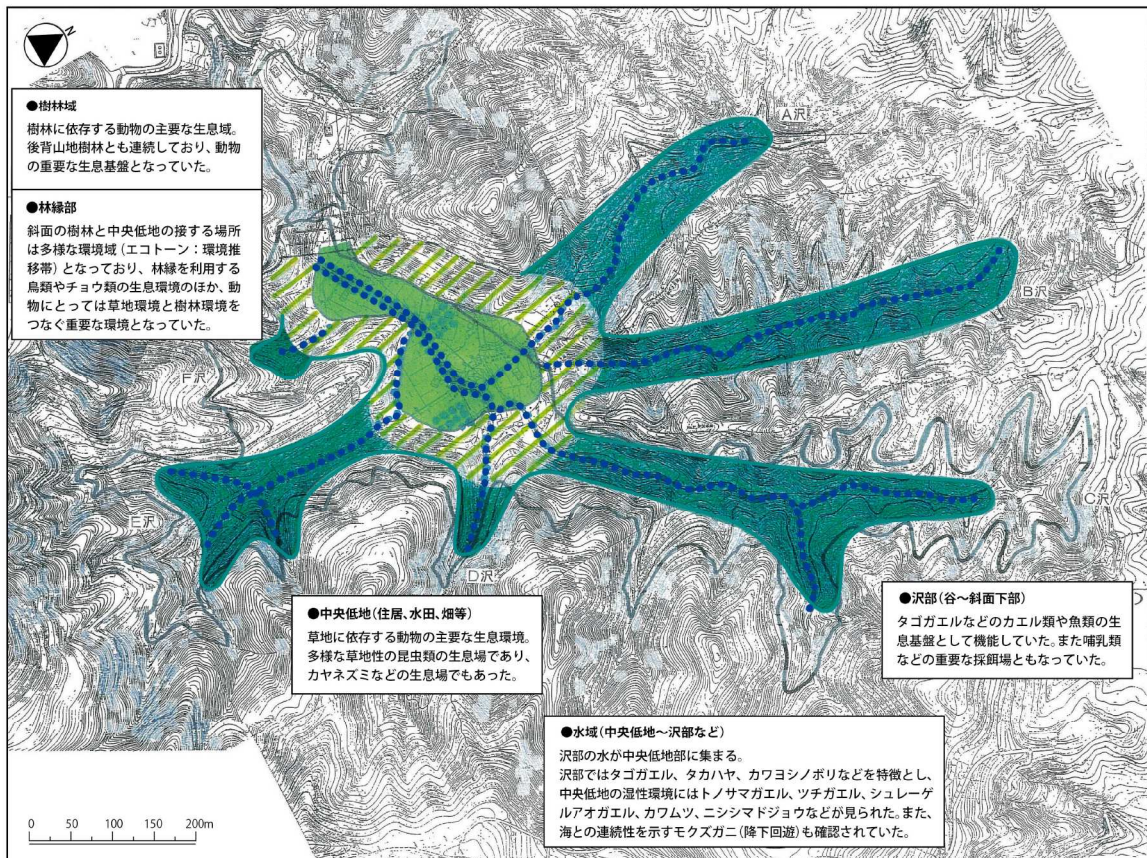


図 4.2.1 動物の分布特性 (改変前：1997 年)

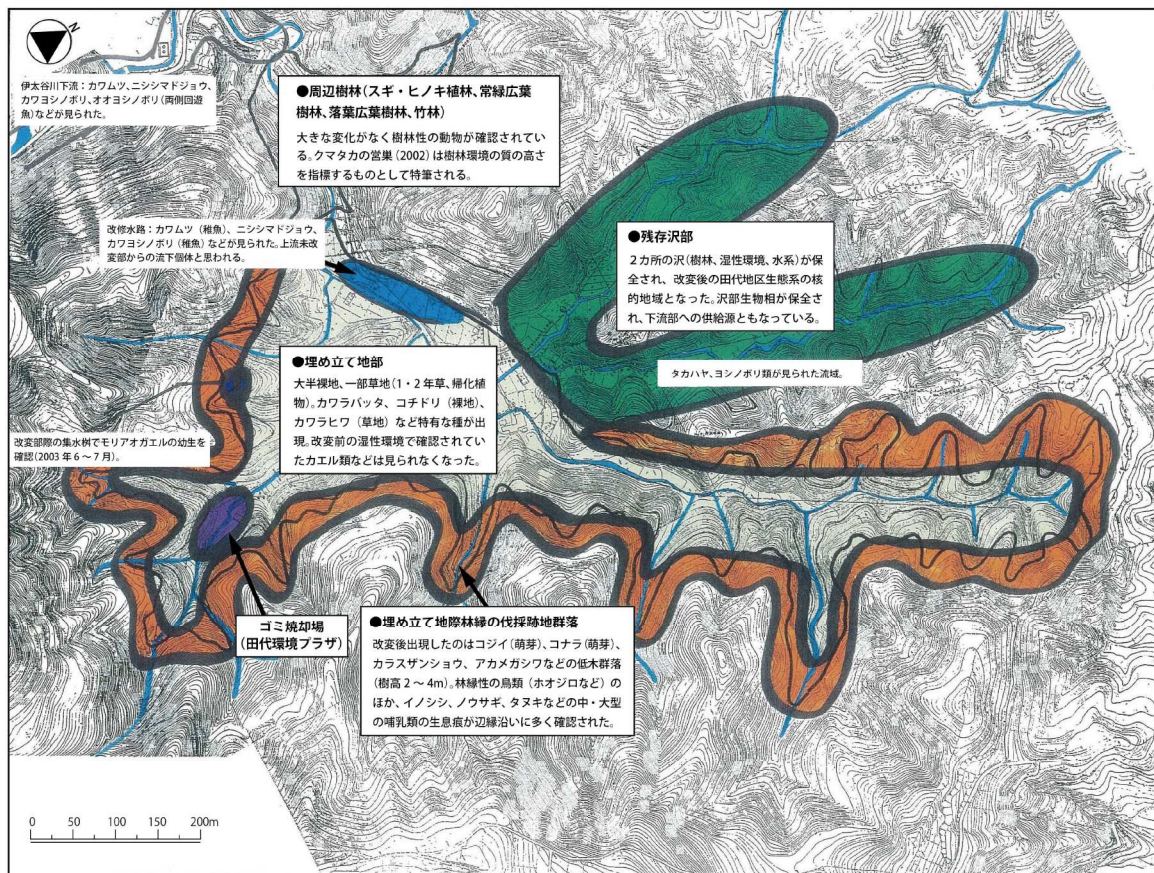


図 4.2.2 動物の分布特性 (改変後：2003 年)